

チョーサーの存在文

藤 原 保 明

0. まえがき

There が代役主語として用いられる、いわゆる存在文は、古英語期にはすでに出現していて、中英語期になるとかなり広く用いられるようになっていた。しかし、この虚辞の音韻・形態・統語・意味等の言語特性に関する通時的研究は、古英語期はもとより、中英語期においても、詳細かつ信頼できるものは皆無に近い。そこで、本稿では、英語の存在文の発達を探る試みの一つとして、チョーサー (Geoffrey Chaucer) の作品に用いられている there を様々な観点から分析し、その言語特徴を明らかにしたい。チョーサーの作品は膨大な量にのぼることから、時間と紙面の制約上、すべてを分析対象とすることはできないので、今回は *Canterbury Tales* 中の General Prologue と The Knight's Tale の 2 編をとりあげることにする。もっとも、この 2 編は合計 3108 行から成り、古英詩『ベーオウルフ』の 3182 行に匹敵する規模であること、とりわけ、there の例が豊富であることから、かなり明確な結論が導き出せそうなので、今後、より多くの作品を対象に分析がなされたとしても、今回の結果に大きな修正を迫られるようなことはないと思われる。

I 英語の存在文の起源と発達

1.1. 存在文の起源と発達

存在文の there の最も古い例として、たとえば OED は (1) に示した 9 世紀末の Alfred の散文で用いられているものをあげている。

(1) a. þā cōm þær gān in tō mē heofencund Wīsdōm. (c888 K.Ælfred *Boeth.* iii.

§ 1) 'Then heavenly Wisdom came to me.'

b. þær is mid Estum ān mægð. (c893 K.Ælfred *Oros.* I.i. § 22) 'There is a maiden among the Estonians.'

一方、8 世紀初頭に口誦によって成立したと考えられている『ベーオウルフ』の場合 (もっとも、現存する写本は 10 世紀後半のもの)、Klaeber (1950: 410)

はかなり虚辞 (expletive) に近い *pæ̃r* の例として (2) の 4 例をあげている。なお、引用例中の / は第一半行の終わり、// は第二半行の終わりを印すものとする。

- (2) a. ne sceal *pæ̃r* dyrne sum // wesana, þæs ic wēne./ (271b-2a) 'nor shall aught of it be kept secret, as I think.'
- b. þāra ðe *pæ̃r* gūð fornam // bēga folces;/ (1123b-4a) 'of those whom war had carried off, of either people'
- c. oðrum swiðor // sīde rīce / þām ðæ̃r sēla wæs. // (2198b-9b) '(but) a great kingdom (belonged) rather to the one who was higher in rank.'
- d. næs ðæ̃r māra fyrst // frēode tō friclan./ (2555b-6a) 'no time was left to beg for peace.'

興味深いことに、Klaeber の刊本よりもはるかに古い Wyatt (1894) に準拠してなされた Clark Hall (1911) の散文による現代英語訳では、(2) の 4 例の *pæ̃r* はいずれも訳出されていないことから、Clark Hall もこれらの *pæ̃r* を虚辞と認めていることが分かる。もっとも、there 構文で書き換えられるのは (2a, d) の 2 例のみであり、しかも、(2) の *pæ̃r* はいずれも頭韻とリズムには関与していないことから、詩の行を埋める補充語句という意味での虚辞ではない。したがって、Klaeber がどういう意味でこれらの *pæ̃r* を虚辞と呼んだのかははっきりしない。いずれにせよ、(1) と (2) の例から判断すると、古英語期には、散文でも韻文でも虚辞 *pæ̃r* を用いた存在文が出現するための条件は整っていたことは確かである。古英語の場合、場所を表す副詞の *pæ̃r* は、動詞を修飾する他の副詞と同様に、動詞の直前に置かれることが一般的であったことから (Quirk and Wrenn 1957: 92-93)、(1) のような存在文は場所を表す副詞の *pæ̃r* + 動詞から発達してきたものと思われる。

中英語期に入ると、韻文、散文を問わず、虚辞 *there* の例は古英語期と比べて格段に増え、*there* 構文の研究には好都合となる。しかしながら、Van der Meer (1929) による *Mandeville's Travels* の統語研究、Kerkhof (1966) によるチョーサーの言語研究、Mustanoja (1960) による中英語の統語研究をはじめ、これまでの中英語の言語研究では存在文はあまり重きがおかれず、それゆえ、Visser (1963)、Fischer (1992)、Denison (1993) など、史的統語研究の集大成においても、存在文に関する情報は全く乏しいというのが現状である。本稿において中英語の存在文の分析を試みる理由はここにある。なお、本稿では、存在文の *there* の音韻上の特徴も探りたいことから、中英語期の詩、とりわけチョーサー

一の作品を分析対象とすることにした。

1.2. 現代英語の存在文

チョーサーの存在文の言語特徴をより明確に示すために、本稿では可能な限り現代英語の存在文との比較検討という記述方法をとることにする。そこで、まず現代英語の存在文の特徴を概観しておきたい。

現代英語の場所の *there* と存在の *there* の区別は多岐にわたるが、本稿では (3) に示した 5 つに焦点を当てることにする。なお、本稿でいう存在文は、実際上の主語である名詞句または名詞類が後方に移動し、主語の位置が代役主語の *there* によって置き換えられた構文を指す (Declerck 1991: 32-33)。

- (3) a. 場所の *there* は一般に強勢を受け、母音は完全音価を保持している ([ðeə(r)]) のに対して、存在の *there* は一般に無強勢であり、母音は弱化し、[ðə(r)] となっている。
- b. 場所の *there* は前方照応的ないしは後方照応的にどこかの具体的な場所を指し示すのに対して、存在の *there* は本来の場所の意味を失っていて、どこかの場所に言及することはない。
- c. 場所の *there* は純然たる副詞であることから、文法上も意味上も主語にはなりえないが、存在の *there* は文法上の主語の役割を果たす。
- d. 場所の *there* はさまざまな動詞と共に起するのに対して、存在の *there* の大半は *be* 動詞が含まれる文や節に限られる。
- e. 場所の *there* を含む文の主語には制約はないが、存在の *there* に導かれる文の意味上の主語は一般に不定名詞句であり、その主要部は名詞または不定代名詞である。

(3a~c) にあげた場所の *there* と存在の *there* の音韻・統語・意味上の区別は、*here* または場所を表す *there* と共に起する (4) のような文において特にはっきりする (Biber, *et al* 1999: 944)。

- (4) a. There's more gravy *here*.
- b. There's still no water *there*, is there?

(3d) にあげた存在の *there* と共に起する動詞には、*be* 動詞の外に、存在・位置・運動を表す *arise*, *come*, *exist*, *live*, *occur*, *remain*, *ride*, *seem*, *sit*, *stand* などの自動詞がある (Declerck 1991: 266-269; Biber, *et al* 1999: 944-947)。

(3e) の制約を敷衍すると、人称代名詞、固有名詞、数量詞は、存在が前方照応的 (anaphoric) に前提となっていることから、*there* 構文の主語にはなりえない。ただし、(5a) の下線部ように *be* 動詞に補語がない場合、または、(5b)

のように相手にあるものを思い出させる場合、あるいは、(5c) のように名詞句が後方照応的 (cataphoric) である場合などは (3e) の例外となる (Declerck 1991: 266-269)。

(5) a. Who else should be informed? — Well, there's Susan, and Jack, and Barbara or Joan.

b. I've finished doing the washing-up. Can I go home now? — Don't forget there's the table to be laid. We're having guests tonight.

c. There wasn't the slightest difference between them.

このように、現代英語の存在文では *there* は文ないしは節の冒頭に置かれ、不定主語を伴うのが典型となっているが、現代英語では新情報を文頭に置くことを避ける傾向が強いことから、存在文には語順の原則のみならず、主題構造や情報構造が深く関わっていることが分かる (Lyons 1968: 334-337, 389-393; Declerck 1991: 19-20, Biber, *et al* 1999: 943-944)。もっとも、話題化 (topicalization) による前置 (fronting) という語順をとる場合はこの限りではなく、新情報が文頭に出てくる。

II. チョーサーの存在文

2.1. チョーサーにおける *there* の用法

チョーサーの作品中の存在文を分析するに先立ち、*there* または *ther* のさまざまな用法や機能について検討を加える必要がある。まず、*there* は *ther* (e)-fore 'therefore', *there-of* 'of this', *there-on* 'thereupon', *ther* (e)-out 'out there', *ther-upon* 'immediately', *ther-to* 'besides, moreover', *ther-with* 'moreover', *ther-with-al* 'by means of it' のように、他の前置詞や副詞と結合し、新たな副詞や接続詞を形成することがある。これらの形式については今回は分析対象とはしない。一方、*ther* は (6a, b) のように他の語と共に関係詞や接続詞の機能を果たすことがあるが、このような *ther as* 'where' や *over al ther* 'everywhere' も今回は分析の対象外とする。さらに、(6c, d) のように、*ther* が単独で関係副詞や接続詞として用いられることがあるが、これらの例も存在文とは関わりがないことから、本稿では扱わないことにする。

(6) a. *Ther as* he wiste to have a good pitaunce. (224) '(In cases) where he knew to have a good pittance.'

b. That proved wel, for *over al ther* he cam, (547) 'That was evident, for everywhere he came.'

c. *Ther* Venus hath hir principal dwellynge, (1937) ‘Where Venus has her chief habitation,’

d. And certainly, *ther* Nature wol nat wirche, (2759) ‘And certainly, when Nature will not work’

したがって、残された *ther* の用法としては副詞か虚辞かのいずれかである。本稿の目的は存在文の *ther* の分析にあるが、この虚辞と副詞との区別はチョーサーの作品では必ずしも明瞭ではない。たとえば、MED は存在の *ther* の例として (7a) を引用しているが、ここに登場する騎士はカンタベリに詣でる巡礼の一員であることが前提となっていることから、この *ther* は 24 行の *in a compaignye* ‘in a company’ と照応する場所の副詞であるという解釈も不可能ではない。他の 20 数名のほとんどの巡礼者についてもこのような書き出しで始まっていることから、どちらの解釈に基づくかによってデータが大きく左右される。次に、(7b) の場合、*ther* の直前には *in hir coppe* という場所を表す副詞句がきているが、両者の間に照応関係は全くないのであろうか？さらに、(7c) の場合、*ther* は後方の *in that place* と照応していないのであろうか？このように、チョーサーの作品中の *ther* は場所を表す副詞句と共起することが多く、照応に関わる疑問が次々と出てくることから、*ther* を虚辞と速断できないことが多い。

(7) a. A Knyght *ther* was, and that a worthy man, (43) ‘There was a Knight, and (he was) a brave man,’

b. That in hir coppe *ther* was no ferthyng sene (134) ‘That in her cup there was seen not a very small portion of grease’

c. A Somonour was *ther* with us in that place, (623) ‘There was a Summoner with us in that place’

次に、*ther* が *be* 動詞以外の動詞と共起している (8a-e) のような例はチョーサーの作品には少なくないが、これらの例の *there* は文法上の虚辞なのか、それともリズムを整えるための埋め草なのか、いずれが妥当な解釈であるのかという疑問も出てくる。ちなみに、(8f) のように祈願文を導く *ther* の特殊な用法もまれにみられる。

(8) a. *Ther* wiste no wight that he was in dette. (280) ‘No one knew that he was in debt.’

b. That in his bed *ther* daweth hym no day (1676) ‘That in his bed no day dawn for him’

- c. Ayeyns his might *ther* gayneth none obstacles. (1787) 'No obstacles avail against his power'
- d. A wolf *ther* stood befor hym at his feet (2047) 'A wolf stood before him at his feet'
- e. And sikerly *ther* trowed many a man (2101) 'And truly many a man believed'
- f. Arcite is coold, *ther* Mars his soule gyle! (2815) 'Arcite is cold. May Mars guide his soul!'

本稿では、このような疑問に現時点では明確な答えを出すことはできないので、以下の分析においては、場所を表す副詞であることが明白な *ther* 以外はすべて対象に含めることとする。ただし、(6) にあげた関係副詞や接続詞の用法に用いられている *ther* は除く。具体的には、General Prologue では 40 例、The Knight's Tale では 56 例、合計 96 例の *ther* が分析対象ということになる。

2.2. チョーサーにおける *ther* の語形

最初に、存在文の虚辞として用いられている *ther* の語形について考察してみたい。現代英語の *there* に対応する語形はチョーサーの作品ではたいていの場合 *ther* であるが、まれに *there* も用いられている。General Prologue と The Knight's Tale では、(9) にあげた 5 例の *there* が用いられているが、興味深いことに、いずれも虚辞ではなく、場所の副詞または関係副詞である。なお、以下の例において、^{◌̊} は強音部、^{◌̇} は弱音部、^{◌̈} は無音または黙字をそれぞれ表すことにする。

- (9) a. *Ānd there̊ oure̊ Hóost biġán hīs hósrs ārestē*(827) 'And there our Host stopped his horse'
- b. *They wóldē, hīr thánkēs, wīlnēn tó bē there̊—* (2114) 'They would, of their own will, desire to be there —'
- c. *There̊ ás nēdē ís they wérēn nó thing ydēl;* (2505) 'Where there was need of them, they were by no means idle'
- d. *Būt thīdēr hē shāl bȳ fórcē, ānd there̊ ābydē.* (2554) 'But he shall be forced (to go) thither, and (to) stay there'
- e. *Ās fórwārd wás, rīght there̊ hē móstē ābydē.* (2619) 'As it was an agreement, he must remain there'

さらに、これらの例を律読してみると、(9a, b, d, e) の 4 例は韻律強勢を受けているが、*there* の語末の -e は、(9a, c, d) では母音接続 (hiatus) によって

無音となっていて、(9d)でも発音されていない、すなわち、弱強勢母音としてリズムに関与してはいないことが分かる。さらに、(9b)では、thereは行末にあり、前行(2113)のelleswhere ‘elsewhere’と脚韻を形成していて、同一語同士による、いわゆる self-rhyme となっていることから、語末の-eが韻を踏んでいたかどうかはこれだけの証拠では分からない。もっとも、thereは古英語の *þær* にさかのぼることから、語末の-eは少なくとも語形上は非語源的である。これらの事実を総合すると、thereの語末の-eを音韻および形態の観点から有意義なものともみなす積極的な根拠は一つもないことになる。したがって、チョーサーの作品では無標の語形は there ではなく ther であり、非語源的な there は韻律以外の何らかの理由に基づく有標の語形とみなしてよい。

2.3. Ther の音韻上の特徴

前節で指摘したとおり、ther は古英語の *þær* /*θæ:r*/ に由来するが、チョーサーの作品では、強勢を受けた場合、母音は /*ɛ:*/、語頭の摩擦音は無声の /*θ*/ であった可能性が高いが、無強勢の場合、母音は弱化して /*ɛ*/ または /*a*/ のいずれかとなり、語頭の子音は /*ð*/ へと有声化していたものと思われる(Kökeritz 1961: 9-11; Blake 1992: 42-65)。一方、therの意味や文法上の機能は、音韻、すなわち、韻律強勢を受けるか否かに深く関わっていることから、本稿では韻律強勢を引き合いに出して ther の機能を明らかにしてみたい。たとえば、General Prologue では、by, in, of, on, to, with などの副詞または前置詞、および ful, wel などの副詞が韻律強勢を受ける確率はほぼ 50% であるのに対して、不定冠詞の an はすべて無強勢、定冠詞の the も 2 例(165, 310)を除いてすべて無強勢、否定辞の ne は 1 例(629)以外はすべて無強勢であるという分析結果が知られている(Fujiwara 1998: 1-6)。このことから推測すると、ther が場所の副詞であれば韻律強勢を受ける確率が約 50% 程度となり、虚辞であればほぼ完全に無強勢の位置に生じるはずである。

そこで、General Prologue と The Knight's Tale の ther および there が生じるすべての行を律読した結果、ther に韻律強勢が与えられる例は前節の場所を表す there の 5 例中の 4 例以外に、15 例(259, 892, 1028, 1246, 1478, 2005, 2016, 2218, 2590, 2675, 2719, 2721, 2809, 2833, 2918) あるが、このうち、虚辞であることが歴然としているのは(10a)の 1 例のみで、他はすべて(10b)のような場所の副詞か、(10c, d, e)のような関係副詞であることが明らかとなった。

(10)a. *Thāt thér nys érhē, wāter, fīr, nē éir,* (1246) ‘That there is no earth,

water, fire, nor air,'

b. *Ůntó thē lýstēs thér hīrē témlē wás*, (2218) 'To the tilting-ground where there was her temple,'

c. *Ānd thér hē lývēth īn jýē ānd īn hōnōur* (1028) 'And he lives there in joy and in honour'

d. *Būt thér ās Í wās wónt tō híghtë Ārcítē* (1557) 'But whereas I was accustomed to be called Arcite'

e. *Thāt prówēd wél, fōr óvēr āl thér hē cām*, (547) 'That was evident, for wherever he came,'

このように、虚辞の *ther* は 1 例を除く 95 例が無強勢であるのに対して、場所の副詞は強勢を受ける確率が高くなる（すなわち、33 例中 15 例 = 45.45 %）。このことは、チョーサーは両者を明確に区別していた、すなわち、虚辞の *ther* は冠詞や否定辞の *ne* と同等に扱っているが、場所の副詞は他の本来語の副詞と同格とみなしていたことを裏付けるものであり、興味深い事実が得られたことになる。

2.4. *Ther* と動詞の共起関係

この節では *ther* または *there* と共起する動詞との関係を明らかにしたい。General Prologue と The Knight's Tale の場合、存在文で用いられている 96 例の *ther* のうち、70 % 近い 66 例は *be*-動詞と共起している。その他の動詞は、(11a) に示したように、自動詞が大半を占めているが、(11b) のような他動詞も 4 例見られる。これらの例のうち、存在・位置・運動を表す自動詞は現代英語と同じであるが、その他の自動詞と他動詞の類別等については今後検討の余地があるものと思われる。

(11) a. *cumen* 'come', *dawen* 'dawn', *dwellen* 'dwell', *fallen* 'happen', *geinen* 'avail', *helpen* 'help', *knelen* 'kneel', *laken* 'lack', *lyven* 'live', *neden* 'need', *pynchen* 'find fault', *rennen* 'run', *ryden* 'ride', *shynen* 'shine', *sitten* 'sit', *stonden* 'stand', *wenden* 'go', *wepen* 'weep'

b. *bryngen* 'bring', *clepen* 'call', *trowen* 'believe', *witen* 'know'

次に、場所を表す *ther* と共起する動詞については、*be*-動詞が 33 例中 11 例と圧倒的に多いことが目立っているが、*be*-動詞以外では (12a) のような存在、位置、運動に関する自動詞が多く、他動詞は (12b) のように例外的に用いられているにすぎない。

(12) a. *abyden* 'abide', *amenden* 'amend', *bifallen* 'happen', *bigynnen* 'begin',

cumen ‘come’, lyven ‘live’, shyveren ‘shiver’, stomblen ‘see’, wenden ‘go’

b. holden ‘observe’, quiten ‘ransom’, shapen ‘shape’, seen ‘see’

このように、ther には、虚辞および場所の副詞という二つの異なる機能があるにもかかわらず、ther と共起する動詞はかなり類似している。この事実はどのような理由に基づくのかについても今後十分な検討が必要であろう。

2.5. Ther と動詞の語順

次に、ther と動詞の語順について考察してみたい。虚辞の ther は、すでに指摘したとおり、その起源から推測して、最も関係の深い動詞の直前にくるのが一般的である。しかし、チャーサーの場合、この無標の語順が崩れ、動詞の後位置に生じる例も珍しくはない。そこで、ther と動詞の倒置はどのような条件の下で生じるのかを明らかにしたい。まず、General Prologue の場合、該当する 42 例のうち、ther が行頭にくる 12 例 (118, 251, 280, 311, 326, 404, 542, 550, 594, 602, 603, 629) について検討してみる。(13) に示したとおり、これらの例では ther は行頭にくることから、弱強 5 歩格のリズムの原則に従って、すべて弱い韻律強勢をうける。したがって、後続の動詞にはすべて強い韻律強勢が与えられることになる。

(13)a. *Thēr koudē nō mán brýngē hím ĩn árřérágē.* (602) ‘No man could bring him in arrears.’

b. *Thēr wístē nō wíght thát hē wás ĩn déttē,* (280) ‘No man knew that he was in debt,’

c. *Thēr wás ālsó ā Nónnē, ā Prīōréssē,* (118) ‘There was also a Nun, a Prioress,’

次に、行頭以外の位置で ther と動詞が無標の語順を維持している (14) のような例 (43, 79, 134, 161, 165, 197, 208, 258, 259, 285, 321, 355, 411, 412, 529, 544, 578, 592, 669) について検討してみる。この場合も、後続の動詞の種類を問わず、ther はすべて弱強勢となっている。

(14)a. *Īn lóvē-dayēs thēr koudē hē múchēl hēlp,* (258) ‘On love-days he could help much,’

b. *Ōf wíhč thēr wéré ā dúszēynē ĩn thāt hóus* (578) ‘Of which there were a dozen in that house’

c. *Wíth hým thēr ród ā gēntīl Párdōnér* (669) ‘With him there rode a gentle Pardoner’

最後に、ther と動詞が倒置し、動詞+ther という有標の語順を示す例につい

で考察してみる。(15) にあげたように、この語順の場合、ther はすべて弱強勢の位置にあり、動詞はすべて強強勢の位置にきていることが分かる。このことから、大変興味深いことに、ther+動詞という無標の語順が倒置するのはリズムだけに基づくものであるという主張が可能となる。The Knight's Tale の場合も同じ現象が確認できたことから、ther+動詞という無標の語順はチョーサーの作品ではすでに確立したものとなっていると言える。

(15) a. Nōon óf hīs bréthērēn cám thēr ín hīs háunt; (252b) 'None of his brothers came in his abode'

b. Īn ál thīs wórlđ nē wás thēr nōon hým lík, (412) 'In all this world there was none like him,'

c. Ā fáirēr búrgēys ís thēr nōon ín Chépē— (754) 'There is no fairer citizen in Cheapside —'

2.6. 存在文における意味上の主語の位置

前節で ther と動詞の語順について考察し、その原則を提示したので、次に、チョーサーの存在文では意味上の主語はどのような位置に生じるかについて分析し、その特徴を明らかにしたい。存在文の ther は文法上の主語となっていることから、意味上の主語は、現代英語の場合と同様であるなら、ther+動詞または動詞+ther の後にくるものと思われる。事実、この推測どおり、General Prologue と The Knight's Tale の存在文では、意味上の主語は、(16) の下線部のように、ther の位置にかかわらず、ther+動詞または動詞+ther の後にくることが多い。

(16) a. *Ther was also a Reve, and a Millere,* (542) 'There was also a Reeve and a Miller,'

b. Of which *ther were* a duszeyne in that hous (578) 'Of which there were a dozen in that house'

c. In al this world ne *was ther* noon hym lík, (412) 'In all this world there was none like him,'

d. Ne *was ther* swich another pardoner. (693) 'There was not such another pardoner.'

一方、(17) の下線部のように、意味上の主語が ther+動詞または動詞+ther に先行する例も少なくはない。

(17) a. A Shipman was ther, wonyng fer by weste; (388) 'There was a Shipman, dwelling far in the west;'

- b. A Somonour was *ther* with us in that place. (623) 'There was a Summoner with us in that place.'
- c. Som tyme an ende *ther* is of every dede. (2636) 'Some day there will be an end of every deed.'
- d. A love-knotte in the gretter ende *ther* was. (197) 'There was a love-knot at the greater end.'

(17d) の *ther was* の場合、*was* が行末にきていることから、*ther* は脚韻の要求を満たすためにこの位置を占めていると考えられる。この *was* を移動させると脚韻が崩れるので対象外とするが、他の 3 例を (18) のように *ther*+動詞+主語という無標の語順に並べ替えて律読してみると、とても興味深いことに、いずれも弱強 5 歩格という正規のリズムを形成することが分かる。このことから、少なくともこれらの例では、意味上の主語の倒置、すなわち、前置は韻律上の理由に基づくものではないと断言できる。

- (18)a. *Thēr wás ā Šípmān, wónyngē fēr bȳ wéstē*; (388)
- b. *Thēr wás ā Sómōnōur wíth ūs ín thāt plácē*, (623)
- c. *Sōm tȳmē thēr ís ān éndē of évērȳ dédē*. (2636)

このような意味上の主語の前置は General Prologue では 15 例生じるのに対して、The Knight's Tale では 4 例ときわめて少ない。前者は 858 行から成るのに対して、後者は 2250 行、すなわち前者の約 2.6 倍の規模であることから判断すると、前置の異常な分布は無視できないものと思われる。General Prologue では多くの巡礼者が登場し、チョーサーはこれらの巡礼者を一人ずつ紹介する。この紹介はパラグラフごとに行われ、新しい登場人物はパラグラフの冒頭に出てくる。これらのパラグラフの冒頭から始まる文の意味上の主語はすべて不定代名詞句となっていて、新情報を担っている。それゆえ、チョーサーは新しい登場人物に焦点を当てるためにこのような不定主語をパラグラフの冒頭に置いたに違いない。そうすると、このような前置現象は現代英語の存在文では全く生じない特異なものであり、存在文の史的発達を探る上で注目すべき事実となる。さらに言えば、チョーサーの作品における *ther* 構文はそもそも何のために用いられたのかという疑問が出てくる。すなわち、1.2.で述べたように、現代英語と同様、新情報を文頭に置くことを避けるために *ther* を用いたとするのなら、(17) の例のように、不定名詞句の意味上の主語が文頭にきて、なおかつ *ther* も用いられているという事実は説明に窮する大きな問題となる。

この難問を解く一つの鍵となりそうなのは、*ther* そのものは用いないが、現代英語では ‘have’ 存在文 (*have-existential*) と呼ばれているものと同じ構文がチョーサーでも用いられていて、(19) のように、不定名詞句が話題化によってパラグラフの冒頭に移動し、焦点はこの新情報に置かれていることである。この場合の前置は不定主語ではなくて不定目的語に生じているが、(17) と (19) を対比させてみると、チョーサーは不定主語も不定目的語も対等に前置させているように思われる。

- (19)a. A Yeman hadde he and servants namo (101) ‘He had a Yeoman and no more servants’
 b. Another Nonne with hire hadde she, (163) ‘She had another Nun with her,’
 c. A Cook they hadde with hem for the nones (379) ‘They had a Cook with them for this occasion’

まとめと今後の課題

今回、チョーサーの存在文を分析し、興味ある事実をいくつも明らかにすることができた。まず第一に、*ther* が虚辞か場所の副詞かの区別が必ずしもはっきりしないこと、第二に、無標の語形は *ther* であり、*there* の語末の -e は語源と韻律の両面から有意義なものではないこと、第三に、虚辞の *ther* は弱化しているのに対して、場所の *ther* は強音部に用いられる程度の韻律強勢を保持していること、第四に、動詞+*ther* という有標の語順は完全にリズムに依存していること、第五に、存在文の不定主語は現代英語とは異なり話題化による前置という現象を示す、などである。

今回は全く考察できず、今後に残された課題の中で最も大きなものは、チョーサーの存在文は否定語を伴う場合がきわめて多いという事実をどう説明するかである。

参考文献

- Benson, Larry D. (ed.) 1987. *The Riverside Chaucer*. New York: Houghton Mifflin.
 Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad, Edward Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson Education.

- Blake, Norman. (ed.) 1992. *The Cambridge History of the English Language*. Vol. II. 1066-1476. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark Hall, John R. 1911. *Beowulf and The Finnsburg Fragment: A Translation into Modern English Prose*. London: Swan Sonnenschein.
- Declerck, Renaat. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Denison, David. 1993. *English Historical Syntax*. Harlow: Longman.
- Fischer, Olga. 1992. Syntax. (Chapter 4, *Cambridge History of the English Language*. Vol. II. 1066-1476) See Blake.
- Fujiwara, Yasuaki (藤原保明). 1998. 「中英語の接語化について」『筑波英学展望』第7号。
- Kerkhof, J. 1966. *Studies in the Language of Geoffrey Chaucer*. Leiden: Universitaire Pers Leiden.
- Klaeber, F. Friedrich. (ed.) 1950. *Beowulf and The Fight at Finnsburg*. Boston: D.C.Heath.
- Kökeritz, Helge. 1961. *A Guide to Chaucer's Pronunciation*. New York: Holt.
- Kurath, Hans, et al. (eds.) 1954-2001. *Middle English Dictionary*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Lewis, Robert E., et al. (eds.) 1994. *Middle English Dictionary*. Part T. 4. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Lyons, John. 1968. *Introduction to Theoretical Linguistics*. London: Cambridge University Press.
- Murray, James A. H., et al. (eds.) *The Oxford English Dictionary*. 13 vols. Oxford: Clarendon Press.
- Mustanoja, Tauno F. 1960. *A Middle English Syntax*. Helsinki: Société Néophilologique.
- Quirk, Randolph, and C.L. Wrenn. 1957. *An Old English Grammar*. London: Methuen.
- Simpson, J.A., and E.S.C. Weiner. (eds.) 1989. *The Oxford English Dictionary*. Second Edition. Vol. XVII. Oxford: Clarendon Press.
- Van der Meer, H. J. 1929. *Main Facts Concerning the Syntax of Mandeville's Travels*. Utrecht: Kemink En Zoon.
- Visser, F. Th.1963. *An Historical Syntax of the English Language*. Part I. Leiden:

Brill.

Wyatt, A.J. (ed.) 1894. *Beowulf with The Finnsburg Fragment*. Cambridge: Cambridge University Press.